

クリミア戦争(1853-56)に見るグローバル化の進展

— 東アジアに影響を与えた最初のヨーロッパの戦争 —

現下の緊迫した国際情勢下、クリミア半島及びその周辺に世界中の視線が注がれつつある。地中海と国際海峡で接続された黒海に面し、歴史上、常に大国の勢力に囲まれ続けた同地域は、これまでも戦略上の要衝であり続けた。

本稿は、こうした歴史上の事象の代表的な例として、19世紀に行われたクリミア戦争を挙げ、当該戦争が東アジアに影響を与えた最初のヨーロッパの戦争であるため、グローバル化の視点から振り返り、現代的意義を問うものである。

コラムという性質上、ディシプリンや時代を超えた研究を概観することは困難であり、クリミア戦争のごく一側面を扱うことしかできないが、1815年のウィーン会議によるいわゆるヨーロッパ協調の終末期の大戦争であることや産業革命の産物としての最新技術が戦場に投入される等の時代背景に着目するとともに、海戦史上の意義及び東アジアに与えた影響を確認することで、現下の国際情勢を読み解く端緒となることを意図している。

戦争の背景と概要

クリミア戦争は、1853年にロシアとトルコの開戦により始まり、途中で英国、フランス、サルディニアの参戦を得て、セヴァストポリ要塞等での激しい戦闘を経て、1856年パリ講和会議によって終結している。

これは、この時期のヨーロッパ大国外交の争点となった「東方問題」、すなわちオスマン帝国（当時）の衰退に伴う外交問題に関わるものであった。トルコの衰退に乗じて勢力を拡大しようとするロシアに対して英国が対抗者の位置に立った¹。

英国は、国際政治上の最も中心的な立場にあり、「イギリスの平和」(Pax Britannica)と呼ばれる時代にあって、経済力と海軍力を誇るその国力によって、国際秩序が保たれていたといえる²。

聖地エルサレムの管理権を巡って、1853年11月、露土両国は互いに宣戦を布告、バルカン半島を南下するロシアの勢いに脅威を感じた地中海に利害関係を持つ英仏は、1854年にトルコ側に立って参戦し、このことは、1815年以来続いたヨーロッパ協調の終止符を意味した³。

英仏の参戦後、主戦場はクリミア半島に移る。最も長く、決定的な戦いとなったセヴァストポリ要塞の戦いにあっては、工業力を背景として戦われた後の第一次世界大戦の塹壕

¹ 有賀貞『国際関係史—16世紀から1945年まで—』東京大学出版会、2010年、80頁。

² 義井博『国際関係史』南窓社、1972年、271-271頁。

³ 君塚直隆『近代ヨーロッパ国際政治史』有斐閣、2010年、237-238頁、また英仏の参戦経緯及びパリ講和会議の細部は、次に詳述されている。

君塚直隆『パクス・ブリタニカのイギリス外交 パーマストンと会議外交の時代』有斐閣、2006年。

戦の先駆けとなる戦闘様相が展開し、約 11 ヶ月の激戦を経て英仏が勝利した。

クリミア戦争は、塹壕以外にも新型ライフル銃、蒸気艦、鉄道、近代的な兵站、電報をはじめとする新しい通信技術、軍事医学が動員された総力戦であり⁴、現代戦の特徴の萌芽が随所に見受けられる。

1856 年、パリ講和会議によって平和は、訪れたものの、バルカン半島をめぐるロシアとオーストリアの対立、ドイツ統一問題をめぐるオーストリアとプロイセンの統一の問題が顕在化する等⁵、国際政治上の分水嶺を迎える。この局面については、多くの史家が多様な立場から研究しているが、我が国において重要な視点は、東アジアに与えた影響に見られる「世界の一体化」という現象である⁶。

この観点からは、極東の国際関係に直接的に大きな作用を及ぼした最初のヨーロッパでの戦争ともされているが⁷、細部は、我が国の開国との関係性に関連して後述する。

クリミア戦争における海戦の歴史的意義

クリミア戦争においては、黒海内及びバルト海での海上戦闘やセヴァストポリ要塞攻略における上陸作戦等に海戦史上の意義を見出すことができる。歴史上著名なトラファルガー海戦(1805 年)と日本海海戦(1905 年)の中間点に位置し、両者の陰に隠れがちであるが、古典的には、ジュリアン・コルベット(Julian Corbett)が、『海洋戦略の諸原則』において、セヴァストポリ要塞攻略作戦に関して制海を行使する方法としての上陸部隊と掩護部隊の関係性を考察する事例とする等⁸、海戦史及び海洋戦略の研究の場においては、一定の関心が払われてきた。

現代の研究は、キングスカレッジのランバート(Andrew Lambert)によって開拓され⁹、ダッカーズ(Peter Duckers)は、戦争期間を通じた海戦史をまとめた。

ダッカーズは、クリミア戦争における海戦を当時、最も強力な艦隊を有した三国すなわち英国、フランス、ロシアにより戦われたものとし、英国の海軍力が大きな優位を示していた時期である一方、新興国の技術獲得による海戦上のアクター増加などの一連の海戦に包含された大小、様々な論点の含有を示唆する¹⁰。

英仏が参戦する前に、ロシアとトルコ海軍により行われた一連の海戦は、史上初の蒸気艦同士により戦われた海戦となり、榴弾砲も初めて用いられ、その威力が認識された海戦であった。シノペの海戦等でロシア海軍がトルコ海軍に示した技術的な優位性は、トルコ

⁴ オーランド・ファイジス著、染谷徹訳『クリミア戦争(上)』理想社、2015年、22-23頁。

⁵ 君塚『近代ヨーロッパ国際政治史』240頁。

⁶ 義井『国際関係史』264頁。

⁷ 中山治一「現代史における世界と日本」『歴史教育』15・2、1967年2月、2頁。

⁸ ジュリアン・スタンフォード・コーベット著、エリック・Jグロウヴ編『コーベット海洋戦略の諸原則』原書房、2016年、416-425頁。

⁹ Andrew Lambert, *The Crimean War: British Grand Strategy against Russia, 1853-56*, Routledge, 1990.

¹⁰ Peter Duckers, *The Crimean War at Sea*, PEN & SWORD MARITIME, 2011, p2.

が英仏の参戦を要望する契機となるとともに、フランスの元首、ナポレオン三世には、蒸気推進かつ鋼鉄のいわゆる「浮き砲台艦(Floating batteries)」の建造を促進させた¹¹。

1855年10月、ロシア要塞キンブルン(Kinburn)の攻略に際しては、浮き砲台艦が、榴弾砲による威力を存分に発揮するとともに、ロシア側からの応戦に耐え、榴弾砲と装甲及び蒸気推進艦の優位性を示す結果となった¹²。

このようにクリミア戦争における海戦の歴史的意義は、産業革命による科学技術の急速な発展によってもたらされた艦艇の武器、推進システムの大転換点となったことである。ただし、技術の革新に戦略や戦術の確立が追いついていなかったことから、帆船の戦闘を蒸気艦により行っているかのような過渡性を有しており、蒸気艦の運動性能を十分に活用した戦略及び戦術の革新によって、主要国海軍が完全に蒸気艦を戦力化し、使いこなしていくには、さらに数十年の期間を要した。

いずれにせよ、クリミア戦争において蒸気推進力の優位性は、顕著に示されており、この事実は、後述するこの戦争が東アジアに影響を及ぼす大きな原動力となった。

クリミア戦争が東アジアに及ぼした影響

クリミア戦争における戦闘は、直接的に東アジアにも及んだ。英仏の艦隊は、カムチャッカ周辺でロシア艦隊の捕捉を試みたものの、その撃破や根拠地の破壊には至らなかったことから、東アジアでの戦闘がクリミア戦争全般の帰趨に決定的な要素となったわけではないが、ヨーロッパでの戦争が、東アジアをも戦域とする拡大がなされたことは注目すべき事象である¹³。

こうした戦域の拡大に対して、クリミア戦争の名称が中心となった半島に由来するものであることから、名称が戦争の規模や態様を十分に表していないとする意見も少数ながら存在する¹⁴。

我が国に対するより具体的な影響として挙げられるのが、開国に際して米国が主導的な役割を果たすこととなったという事実である。欧州の主要国は、ロシアとの戦闘に専念しており、東アジアに関心を払うとしても、先述したロシア艦艇の捕捉等が主であった。このような環境は、1853年から54年にかけて米国が有力な艦隊を送り、日本の開国に主導的な役割を果たすことを容易にした¹⁵。

もともと、ペリー率いる黒船艦隊の航海も容易なものではなく、石炭の補給上、太平洋横断は困難であり、大西洋を横断してインド洋経由で来航している。英国の海上輸送網を借りることであり、石炭の備蓄も心細く、なるべく帆を張って風力で航行し、伊豆半島付近から帆をたたみ、石炭を焚いて、威風堂々、浦賀水道を北上してきたというのが実態で

¹¹ 外山三郎『近代西欧海戦史』原書房、1982年、14頁。

¹² Duckers, *The Crimean War at Sea*, pp138-139.

¹³ 中山治一「クリミア戦争の意義——試論——」『人文研究』大阪市立大学、20-9、1969年、62頁。

¹⁴ ファイジス『クリミア戦争(上)』23頁。

¹⁵ 有賀『国際関係史—16世紀から1945年まで—』84頁。

はあったが¹⁶、クリミア戦争の東アジアへの影響も黒船艦隊の来航も、艦艇推進システムの革新というシーパワーの急速な発展が、その下支えとなっていることは論を俟たない。

より高次の国際関係上の視点からの東アジアへの影響としては、クリミア戦争後にロシアがよりアジアに積極的な関与を求めることを予期した英国が中国大陸への関与を積極的に行っていたとの要素が間接的ながらも指摘されている¹⁷。

以上、クリミア戦争をグローバル化の視点から振り返り、シーパワーの革新という要素からヨーロッパの戦争ながら初めて東アジアに影響を及ぼした事実について考察したが、当時、蒸気艦により海路つながれたクリミア半島と東アジアは、約 160 年後の現代にあつては、陸路、空路はもとよりサイバー空間、宇宙を含めたあらゆる領域において接続されている。当時は、インド太平洋によってのみ接続した海路という点でも気候変動による環境変化は、北極海経由というさらに近距離の航路の可能性が見出されつつある。

このようにクリミア半島の情勢が、大きく世界に影響を及ぼす社会となった今日において、その源流としてのクリミア戦争の歴史的意義は、拡大されているように感じられる。クリミア戦争後のパリ講和会議から 150 年を経た 2006 年頃には、この節目を意識して再考する研究があらゆる視座からなされているが¹⁸、今後、現代的な関心から、より地政学的観点に立った研究の進捗が待たれる。

(2022 年 2 月 21 日 脱稿)

(海上自衛隊幹部学校 戦史統率研究室 本名 龍児)

(本コラムに示す見解は、海上自衛隊幹部学校における研究の一環として執筆者個人が発表したものであり、防衛省・海上自衛隊の見解を表すものではありません。)

¹⁶ 五百旗頭薫、奈良岡聰智『日本政治外交史』放送大学、2019年、84頁。30頁。

¹⁷ 中山「クリミア戦争の意義——試論——」61頁。

¹⁸ 上宮真紀「クリミア戦争再考：戦後 150 周年の見直しとその動向」『甲南大学紀要.文学編』140 巻、甲南大学文学部、2006 年、146 頁。